
勇者な僕のくえすと

ジュリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者な僕のくえすと

【Z-コード】

Z7660C

【作者名】

ジュリア

【あらすじ】

僕が見つけたのは、僕が小さい頃に流行ったゲームの大作だった。
最近知った裏ワザを使って見たかったこともあり、早速やってみる
のだが・・・

序章

俺の名前は神崎進。言つてみるなら僕はゲームナーである。発売されたほとんどのゲームはほとんど攻略済みで、その豊富な知識（？）でゲームコメンテーターとして働いている。そんな僕が、自分の部屋を掃除していると・・・

ガサガサ・・・ゴト・・・

ん？なんだこれは？

それは10年程前にゲームブームの引き金となつた「おら!ゴンクエスト」ではないか！…しかもシリーズで一番面白かつた3である。

うお～ナツカシ～

言つまでもなく即プレイ！

このゲームは裏技があり、名前選択で「最強さん」とになると、全パラ999のアイテムフルコンプの状態で始まるのだ。ただそれをやると、とてつもなくつまらないので今まで一度もやっていなかつた。

じゃあやつてみるか。

今まで物語のキャラの台詞を暗唱できるへりこやり込んだゲームにスイッチを入れる。

そこに可憐な女神様が現れ、

「あなたの名前は？」

と聞いてくる。

僕は当然、「最強さん」と入れる。

・・・たしかこの後「それでは冒険のたびへー」って書つんだつけ?
?・?・?と期待しながらAボタンを押す。

すると女神様は突然微笑み、

「待つておりました勇者様！」

と言い放つた。

あれ?こんなこと言ってたつけ?

と思つた瞬間・・・

グラリ・・・

ん!?なんだ?

僕の部屋の周りの風景が歪んでいく。何が起こっているんだ?

とそのとき、ピカッとあたりが光ると僕はその光に吸い込まれていった。

・・・・

? ? ? 「起きなさい、最強さん」
ん？なんだ？

気がつくと僕は暖かいベッドの中で眠りこなしていた。

? ? ? 「起きなさい、最強さん。国王様がお呼びよ。」

ん？この呪詞、ビリかで聞いたことがあるよつな・・・

はっ！――分かった！これは確かおいらゴンクホストの冒頭部分ではないか！

そして田の前に立っているのは、主人公の母親。勇者ノトスの妻である。

どうやら、ゲームの中に吸い込まれてしまつたらしい・・・

母親「起きなさい、最強さん。起きなさい最強さん・・・」

そうだー起きないと一生このループが続くんだった

起きようとして立ち上ると、本来付けている布の服ではなく、神龍の鎧を付け、腰にはエクスカリバーがささっていた。

アイテムコンプの威力とは未恐ろしいものだなど、実感した。

母親「それでは、王宮に向かうのよ。道は分かる？」

当然知っているが、『いいえ』と言つておけば王座まで自動で連れてつてくれるのだ。

最強さん「いいえ」

うおおおおおおおお――――――なんて無機質な回答。現代じゃありえん発言だな。

母親「あらそりなの?」じゃあ今日は私が連れてつてあげましょ。う。まず家を出たら・・・」

ベジベジしゃべられても全部知ってるからなー

母親「・・・あると国王様のお部屋よ。じゃあ行きましょう。」

とこゝひとりでに僕の体が動き出す。・・・うわー変な気分。

まあとりあえず・・・これからどうじょり?

そんなことはお構いなしに主人公の母親は無表情でずんずん歩いていく。

続く。

序章（後書き）

短いですが、その辺は駆け出しつてことで勘弁してください（何こんなノリで次もどうぞよろしく

第一章

国王「おおーよぐれ参られた！伝説の勇者の息子最強さんよー。」

「これがこの国の王様。そのくせに名前がない。このあと何か頼みごとをやれるんだっけ？」

国王「突然だが、わが国の商業都市が魔物の被害を受けたらしい。悪いが早急に退治してはくれぬか？」

やつぱり。つていうかこの国の護衛隊はなにやつてんぢやう？・・・で、勇者が国を出た隙に魔物の大将が攻め込んで、姫がさらわれるんだったな。

最強さん「分かりました。」

しかたねえ、行つて来るか。

一步城の外に出ると僕はテレビポーテーションを唱え、ひととんど行って来ることにした。

？？？「げはははははー泣けー喚けー！」

最強さん「そこまでだー！」

？？？「お前はー？」

最強さん「俺の名は最強さん！お前を成敗しに来たー覚悟しろー！」

？？？「ほん！返り討ちにしてくれるー。」

ヒューハーン…………グサツ…………ドサ…………

？？？「おひ俺に何をした・・・」

最強さん「いや、石投げただけ。」

？？？「そ、その程度で・・・（ガク）

いやー、さすが腕力999だ。もつなんか気持ちイー

あつそつ今頃城が襲われて頃だ・・・

と言つたかと思つと最強さんはテレポートした。

？？？「ぬはははははあー、姫は頂いていく。」

最強さん「ひよひよと待て、魔下七龍兵团長・腐敗の黒龍よ

黒龍「……貴様は・・・勇者ーなぜ今ここにいるーそしてなぜこの時点でわれらを知つているー。」

最強さん「まあ、お前らは何度となく倒したからな・・・」

黒龍「なにを訳の分からん」と・・・だがまあいい。ソレで倒すまでだあ！――！」

そういうと、後ろにいた他の六体のドラゴンも姿を現した。

黒龍「この技で仕留めてやる！七色の龍吹い……！」

これは、七体の龍の合体攻撃で、威力300に加え、瀕死以外の全ての状態異常にかかる、凶悪な技である。

黒龍「一人で挑みかかったことが祟ったな！苦しみの果てに死ぬがいい！」

しかし勇者は七色の玉を持って、平然と立っていた。

黒龍「……なぜそれを持つているんだああああああああああああああ！」

これは状態異常から身を守る装備品で、終盤で手に入るのだが・・・まあいつからは言わなくても分かるだろう。

最強さん「これで分かつただろう。おとなしく巣に帰れ。」

黒龍「くうううう馬鹿にしおって。このまま帰れるかああ

と物理攻撃を挑んできた。が、

黒龍「うがああああああああ

突っ込んできたところに指を一本出したら、黒龍の体を貫通した。

最強さん「どじめだ。ビックバン！」

この一瞬、黒龍は思った。なぜこの男はこんなに強いのか、あとな

ゼ序盤から田が飛び出すまでの装備をしてくるのが

ぐおおおおおおおおおん・・・

この爆撃で散つた瓦礫が他の龍たちを襲い、たちまち全滅した。

部屋の隅でキヨトンとしていた姫と王は互いに向かい、お互に見たものを確認しあつた。そして・・・

国王「おお我らが勇者ーついに龍どもを打ち破り、姫を取り戻されたのだなー！」

いやいや姫とられてないし。・・・龍倒してフラグがたつたのか。

国王「やはり本物の勇者は御強い。魔王が倒れるのも近いー！」

最強さんは口元でふつと笑いつつ、魔王を倒すべく魔界へ出発した。

第一章（後書き）

読み終わったら評価をお願いします。

（魔王殿）

？？？「クツクツク。もうすぐ魔王下七龍兵团が姫を連れて到着するころだな。まあ勇者が来るのにはまだ時間がある。ゆっくり計画を進めるか・・・」

魔王は絶望の間に一人で腰掛け、これから計画を練つていろとしりである。

・・・ギイ・・・

とびらが開く重い音がする。

魔王「おおー帰ったか」

しかし扉を開けたのは、魔王が待ち望んだ巨体ではなく、一人の人間だった。

最強さん「よう。また逢つたな。」

魔王「なにー？勇者だとーーこの間にーーくーー？」

最強さん「ん？ついさっきここに直接ワープしてきただけ。そろそろ勇者にも飽きてきたから一瞬でかたづけさせてもうおう。」

と訴つと勇者は一矢を取り出しつつ・・・

最強さん「必殺金貨シユートー。」

と、それを思いつきり投げ出した。

間一髪でそれを避けた魔王だったが3層式の城壁がいとも簡単に粉砕した。

魔王（何なんだこいつ…？無茶苦茶だ）

危機を察知した魔王は黒夢のマントを使いワープしてしまった。

最強さん「逃がすかあ！…！」

知恵999の力を發揮し、魔王の居場所を特定すると、そこへワープした。

魔王「危なかつた…」

ここは魔王の夢の世界。本来はここに勇者を閉じ込めて、その間に世界の半分を乗っ取る計画のために使われるものだが…

魔王「まさか俺様が逃げるためにここへ来るとは…まあ暫くは安全だらう。」

最強さん「それはどうかな

魔王「…！」

そこにはいる筈のない勇者が立っていた。

魔王「なぜここが分かった！？」

最強さん「勘」

魔王「なんて奴だ・・・だがここは俺様の夢の世界。貴様に勝ち田はない。」

最強さん「口喧嘩しに来たわけじゃねえ。必殺金貨シユートー。」

魔王「フンー甘い」

突然空間が収縮し、金貨は消え去った。

魔王「ここは俺の夢の世界なんだ。全てを俺の好きなように操れる。言つたらつい貴様に勝ち田は無いと!...!...!」

確かにまずかった。たぶん魔法も効かないだろうし。

魔王「こいつからいくぞ」

また空間が変化し、そこから緑色の閃光が発射された。

魔王「それはザラキの呪文の具現化体だ。触れれば即死だ。」

なんてこつた。防御999の意味がない。まあ素早さ999だから当たる筈ないんだが・・・

最強さん（あつやつだ。）

名案を考え付いた。そして魔王の懷に潜り込むと、白夢のマントを被せた。

魔王「なつなに！」

マントの効果でまた城の戻ってきた。

魔王「まつまだだ！分身！」

といふと、魔王は3人になつた。

魔王「どれが実体か分かるかな？」

勇者は少し考えると一番近い魔王に近づき、張り手を食らわせた。

魔王「ナバアアアアアアアアアアアアアア」

それは魔王の実体で、腕力999の張り手を食らつた魔王は、壁を突き破り、遠くに飛んでいつてしまつた。最強さんは着地地点にワープして待つてた。

魔王「なぜ俺様が実体だと分かつた！」

最強さん「勘。止めの必殺金貨シユート！」

魔王はこの瞬間、世界の不条理さと、ゲームの開発者を恨んだ。

魔王を倒した瞬間、目の前がカツと光り、その光に飲まれた。

神崎「ん？」「は・・・」

田を覚ますと、辺りは僕の部屋で、田の前のTVにはゲームクリア

のHNDIINGが流れていた。」

神崎「僕は今何をしてたんだっけ？まついつか。」

彼は全てを忘れていた。でも、心の中に何かしらの達成感があつたのも事実だ。

彼はまた、日常に身を投じていった。

真の天才には常識は通用しない。

人間の中に天才は存在しない。

人間は常に常識の檻の中で生活しているからだ。

後日談。

この後、えにくすのオラゴンクエストの開発者が全員謎の高熱に襲

われる。原因は不明だ。

また、このあとに発売されたオラゴンクエストの魔王は、全部異様に強かつたそうだ。

終章（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
本当に短かったです、次回作に期待ください（あ
評価お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7660c/>

勇者な僕のくえすと

2010年10月11日12時27分発行